

第1章 「親学習プログラム」の活用状況調査

今年度の調査研究は、17年ぶりに家庭教育を取り上げた昨年度の調査研究を受けて実施したものである。昨年度の「栃木県における家庭教育支援の状況調査」から明らかになったものを基に、研究のテーマや方針を設定し、「思春期版家庭教育支援プログラムの見直し」を進めた。

具体的には、県立学校における活用状況調査で現状を把握し、研究協力委員とプログラム活用等について協議を行い、研究協力校での実践を通して、最後は研究成果を資料にまとめるなどして普及、啓発を図ることを研究方法とした。

この第1章では、今年度の調査研究のテーマや方針等を設定した経緯や、県立学校における「親学習プログラム」の活用状況を把握するために実施した、アンケートやヒアリング調査を中心に紹介する。



1-1 研究の概要

(1) 研究の背景と目的

今年度の調査研究は、17年ぶりに家庭教育を取り上げ実施した昨年度の「栃木県における家庭教育支援の状況調査」を受けたものである。

具体的には、「PTA指導者研修参加者への調査」「市町教育委員会生涯学習課への調査」「公民館等への調査」と大きく3つの取組があり、主にアンケートやヒアリング調査を実施した。PTA指導者研修とは、小中高特別支援学校においてPTAで指導的立場にある保護者や教員等を対象に、資質向上を図ることを目的として、教育事務所ごとに行われるものである。

図1は、PTA指導者研修参加者への調査結果から、「子育てに関して学んでみたいことは何か」に対する回答をまとめ、保護者と教員のそれぞれ上位4位までを表にしたものである。教員には、保護者側に出てこない「スマホやゲーム等」の関心が最も高いといった違いが見られるが、子どもとの関わり方や思春期の向き合い方については、保護者・教員のどちらにも入っており、関心の高いことが分かる。

保護者			教員		
順位	テーマ	%	順位	テーマ	%
1	子どものほめ方、しかり方	42.1	1	スマートフォン・ゲーム機器等	35.4
2	思春期の子どもとの向き合い方	39.7	2	親の役割	34.8
3	親の役割	33.2	3	子どものほめ方、しかり方	34.1
4	進路について	23.8	4	思春期の子どもとの向き合い方	26.2

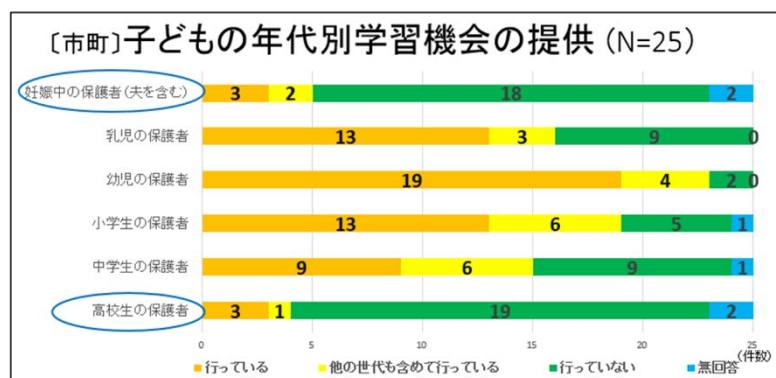
【図1】

図2は、市町教委生涯学習課等への調査結果から、子どもの年代別学習機会の提供に対する回答をまとめたものである。妊娠中と高校生の保護者対象の提供が、他に比べて非常に少なくなっており、公民館等への調査結果も同様であった。

そういった調査結果から、家庭教育支援の対象は、乳幼児から小学生の保護者が中心で、妊娠中の保護者と高校生の保護者に対しては、学習機会、親子の体験活動とも少ないといったこと

などが見えてきた。そこで、今年度は、保護者が学びたいニーズとして「思春期の子どもとの向き合い方」が高いこと、乳幼児期から子どもが自立するまでの切れ目ない家庭教育支援を考慮した場合、市町では提供されることが少ない高校生の保護者を対象とした学習機会の実情を確認すること、県の支援として要望があった「学習プログラムの提供」に焦点をあてることにした。さらに、昨年度から引き続き研究顧問を依頼している牧野カツコ宇都宮共和大学特任教授からの「より活用してもらえのための調査研究ができれば」という助言を考慮し、研究のテーマ等を設定することにした。

そこで研究をどう進めていくのか考えた際に、「思春期・保護者対象・プログラム」というワードから結びつくものとして、県がすでに作成している「親学習プログラム・思春期版家庭教育支援プログラム」があった。このプログラムを柱にしていこうと決めたが、聞こえてくるのは、「活用されていない、知らない」といったものであった。そこで、取り組みやすく、効果的に展開できる親学習プログラムと



【図2】

なれば、積極的に活用され、学習機会の充実が図れると考え、すでにある「思春期版家庭教育支援プログラム」を見直し、工夫改善を図っていくこととした。

（２）研究の方法

「思春期」を対象とした研究のため、まず県立学校における「親学習プログラム・思春期版家庭教育支援プログラム」の活用状況を調査して現状を把握することからスタートし、その結果を基に研究協力委員とプログラム活用等について協議を行い、研究協力校での実践を通して、最後は研究成果を資料にまとめ普及・啓発を図るという研究方法にした。

研究協力委員は、顧問の牧野カツコ先生の他に、生涯学習課、各教育事務所の家庭教育担当者や、地域での活動実践者である県家庭教育オピニオンリーダー連合会長、親学習チーム日光代表といった家庭教育支援プログラムに関わりの深い方々にお願いをした。

（３）成果の活用

- ・ 県立高等学校、特別支援学校に資料（リーフレット）を配付するとともに、総合教育センターWebサイトに掲載することで、広く周知し活用促進を図る。
- ・ 研修や会議等において、調査研究の成果を説明する内容を入れ、教員に対して直接的な働きかけを行う。
- ・ 県立学校PTAでリーダー的な立場にある保護者に対して、調査研究の成果を紹介するなど直接的に働きかける。

（４）主な活動内容

- ・ 研究協力員の委嘱
- ・ 研究協力校の選定
- ・ 研究会議
- ・ 県立学校対象のアンケート調査、ヒアリング調査
- ・ 研究協力校でのプログラム実施
- ・ 県立高等学校PTA研修会での研究についての紹介
- ・ 教育研究発表大会での発表
- ・ 成果物（リーフレット）作成

1-2 県立学校対象のアンケート調査

(1) 調査の目的

県立高等学校、特別支援学校における親学習プログラムの活用状況を把握し、「親学習プログラム」を効果的に展開するために何が必要かを探るためのデータを得る。

(2) 調査対象

県立高等学校 69 校（全日制 59、定時・通信制 10）、特別支援学校 16 校、附属中学校 3 校の計 88 校を対象に行った。

(3) 調査方法

電子データによる調査書に記入していただくという方法で、今年度も含めて過去 3 年間の状況について回答を得た。回収率 100%であった。

対 象	数	回収数	回収率
高等学校	69 校	69	100%
特別支援学校	16 校	16	100%
附属中学校	3 校	3	100%

(4) 調査内容

【保護者を対象にした学ぶ機会】

- ・ 保護者を対象にした学びの機会の有無
- ・ 親学習プログラムの活用の有無
- ・ 保護者を対象にした学ぶ機会を提供する際に重視している点

【親学習プログラム指導者の活用がある場合】

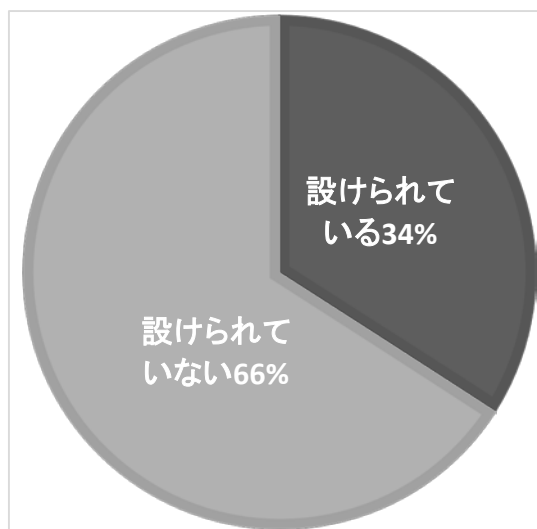
- ・ 活用の仕方（いつ、だれが進行役となり、どんな場面で、どのようなテーマで）
- ・ 効果を感じていること
- ・ プログラムをさらに充実させるために必要なこと
- ・ 外部人材活用の有無
- ・ 外部人材活用で感じていること

【親学習プログラムの活用がない場合】

- ・ 活用したことがない理由

(5) 集計結果

【問１】貴校において、保護者を対象に子どもとの関わり方について学ぶ機会が設けられていますか。

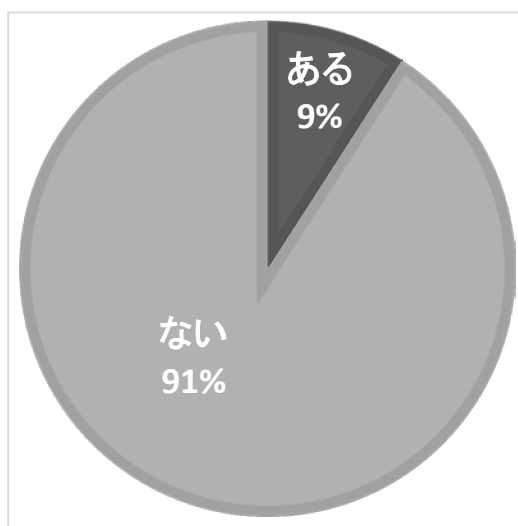


設けられている学校の割合が 34%で、具体的な取組としては、P T A総会や学年保護者会、支部会といった保護者が集まる機会に講演会を行うという回答が多く見られた。

【問２】貴校において、保護者を対象にした学びの機会に親学習プログラム・思春期版家庭教育支援プログラムを活用したことがありますか。

※活用したことがある→問３～問８へ

※活用したことがない→問９へ



活用があると回答した学校の割合は 9 %で、その内訳は、高等学校 4 校、特別支援学校 3 校、附属中学校 1 校であった。

【問3】活用の仕方（いつ、だれが進行役となり、どんな場面で、どのようなテーマ）について詳しく教えてください。※複数回実施している場合はそれぞれお書きください。

◎いつ

H29 以前：10 件（7 校）、H30 実施：2 件（2 校）、H30 予定：2 件（2 校）

◎進行役

県職員：11 件、家庭教育支援チーム：1 件、臨床心理士：1 件、外部講師：1 件

◎場面

P T A 学年部会・保護者会：7 件、P T A 研修会：4 件、P T A 総会：2 件、振興大会 1 件

◎テーマ

「我が子は思春期真っ只中！～思春期の子育ては戸惑いや悩みの連続です～」：6 件

「我が子の進路とどう向き合ってますか？」：3 件

「思春期の子どもとの関わり方」：1 件

「障害のある我が子の理解～社会的自立までの子どもの成長に応じた保護者の対応～」：1 件

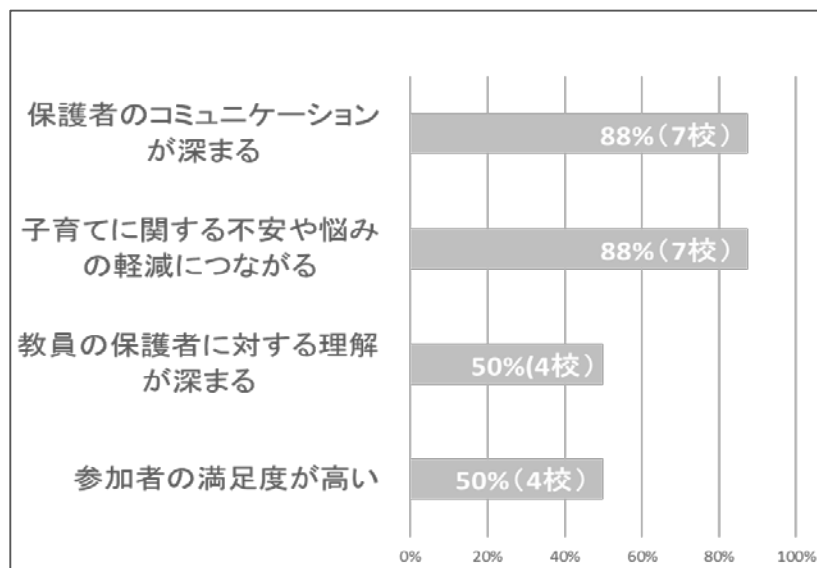
「将来の生活設計における家族で準備しておくこと」：1 件

その他：2 件

今年度の活用があるのは4校で、過去3年間に実施校は、7校から4校になっていることが分かった。進行役は外部人材が務め、活用場面の多くがP T Aの集まりだった。実施しているテーマの多くは、子どもとの関わり方、向き合い方に関するものであった。

【問4】プログラムを活用している中で効果を感じていることについて、あてはまるものをすべて選び、具体的な内容等あれば空欄にお書きください。

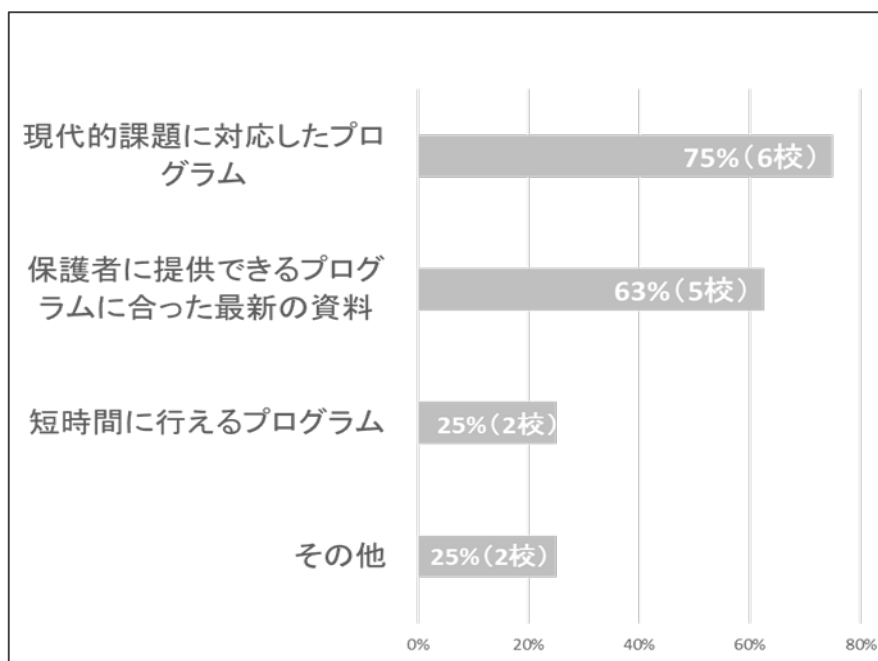
〔活用がある学校(8校)の集計結果〕



「保護者のコミュニケーションが深まる」、「子育てに関する悩みの軽減につながる」という回答が多い結果となった。具体的な内容として、「話し合い・発表して悩みを共有できる場所がよい」「教員側も保護者理解の場としてよい機会になる」という回答があった。

【問5】プログラムをさらに充実させるために必要なことについて、あてはまるものをすべて選び、具体的な内容等あれば空欄にお書きください。

〔活用がある学校(8校)の集計結果〕



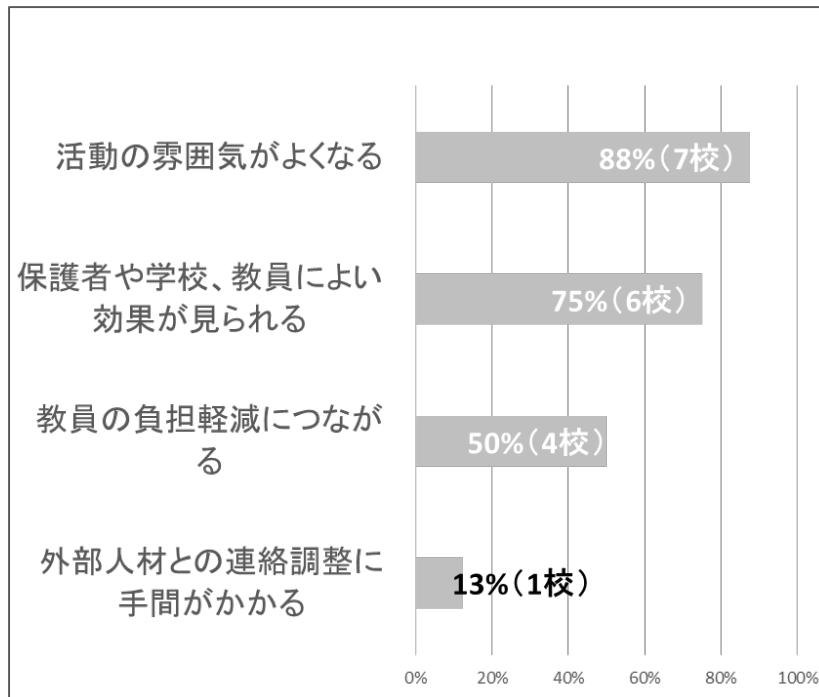
「現代的課題に対応したプログラム」、「保護者に提供できるプログラムに合った最新の資料」という回答が多い結果となった。その他では、「ワークショップ形式は楽しめる保護者がいる反面、嫌がる保護者もいます。それが故に、保護者会に参加したくないという保護者もいます」、「特別支援学校では、児童生徒の個人差が大きいため、一つのプログラムを全てに共通させることは難しいと感じている」という回答があった。

【問6】貴校において、外部人材を活用して親学習プログラム・思春期版家庭教育支援プログラムを実施したことがありますか。

→8校全てが「実施したことがある」と回答。

【問7】外部人材を活用している中で感じていることや考えについて、あてはまるものをすべて選び、具体的な内容等あれば空欄にお書きください。

[活用がある学校(8校)の集計結果]



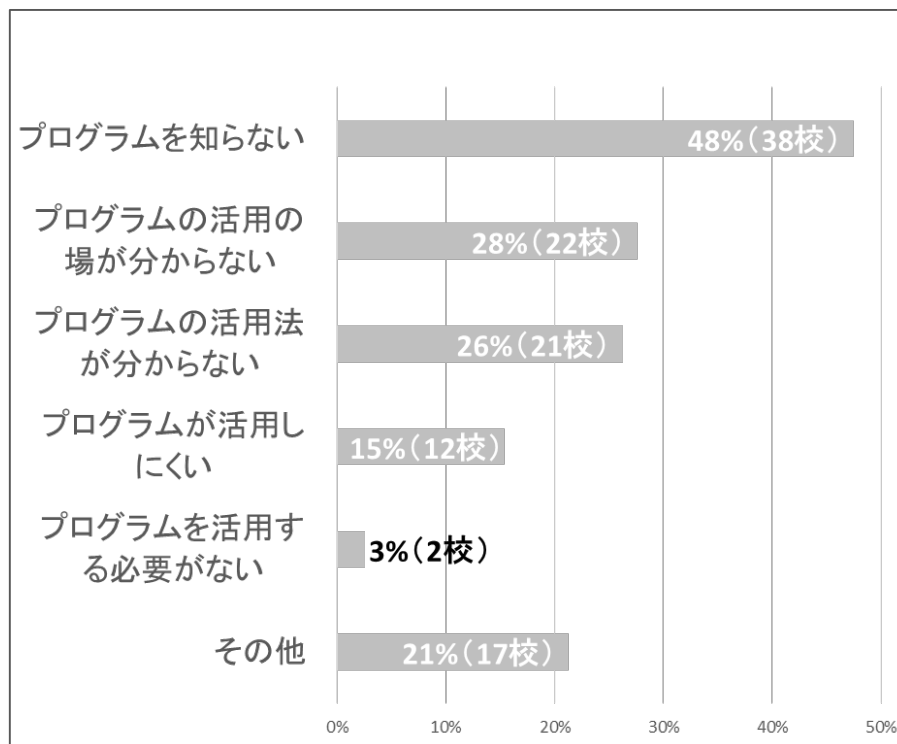
「活動の雰囲気がよくなる」、「保護者や学校、教員により効果が見られる」という回答が多い結果となった。具体的な内容として、「教員の保護者への対応が丁寧になる」、「会場づくりなども含めて全部やってくれるのでありがたい」という回答があった。

【問8】外部人材を活用していない理由について、あてはまるものすべてを選んでください。

→8校全て外部人材を活用しているため、回答した学校はなかった。

【問9】活用したことがない理由について、あてはまるものすべてを選び、具体的な理由があれば空欄にお書きください。

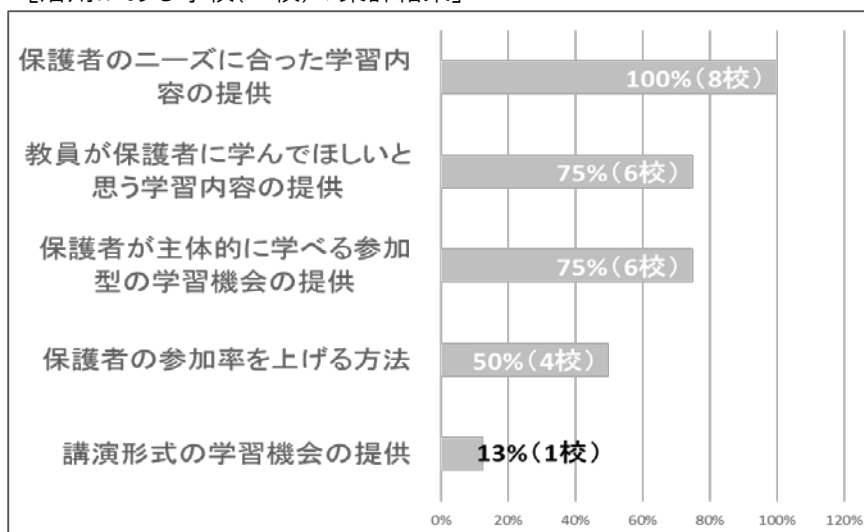
〔活用がない学校(80校)の集計結果〕



「プログラムを知らない」という回答が最も多く、続いて「活用の場が分からない」、「活用法が分からない」であった。具体的な内容として、「長時間に及ぶプログラムは活用しにくい」、「教員に、新しいもの（主体的に学ぶ、参加型の学習プログラム）には取り組みづらい、負担が増えるという意識があるように思う」、「プログラムがあるということは知っていたが、その内容を確認したことがなかった。今後、機会があればプログラムを活用することを検討したい」という回答があった。その他では、「行事に新たに組み入れる時間的、人的余裕がない」といった回答があった。

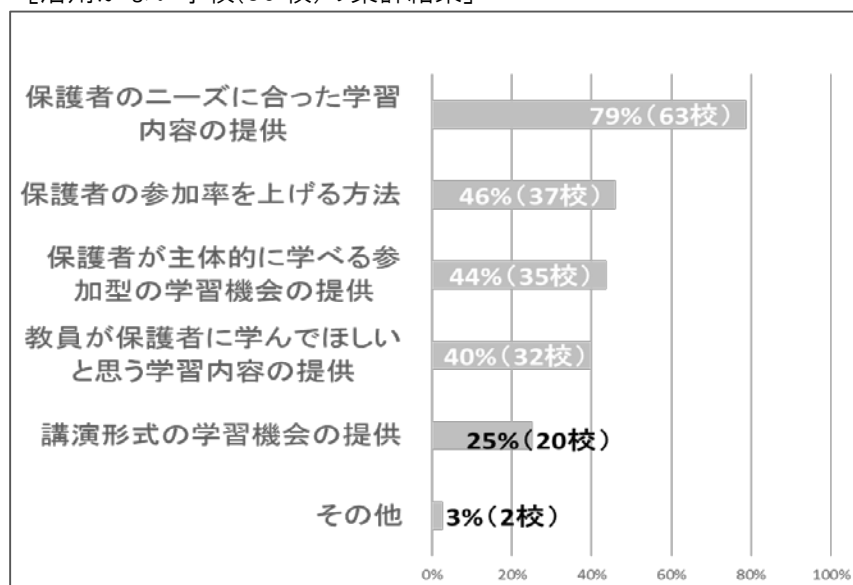
【問 10】貴校において、保護者が子育てについて学ぶ機会を提供する（提供することになった）際、重視している（重視したい）点をすべて選び、具体的な内容等あれば空欄にお書きください。

[活用がある学校(8校)の集計結果]



「保護者のニーズに合った内容の提供」を全ての学校が回答していた。また、「教員が保護者に学んでほしいと思う学習内容の提供」、「保護者が主体的に学べる参加型学習機会の提供」の回答也多かった。具体的な内容として、「短時間でできるプログラムをPTA 総会に組み込み、総会の出席率と保護者学習の参加者の両方を増やしたい」という回答があった。

[活用がない学校(80校)の集計結果]



「保護者のニーズに合った内容の提供」という回答が最も多かった。具体的な内容として、「アンケートを取り、研修内容の希望を聞いて参考にしている」、「学校への関心を持つ保護者ばかりではないので、参加してみたいと思わせる内容、魅力の持てる内容について苦慮している状況にある」という回答があった。その他では、「日時、場所、内容など保護者が参加しやすい設定にする」という回答があった。

【問 11】 その他、親学習プログラム・思春期版家庭教育支援プログラムについて、何か御意見等ありましたらお聞かせください。

[活用がある学校(8校)の集計結果]

○プログラムに対する自由記述

- ・ 通学区域が広域になる高等学校の保護者は、相互に交流する機会が少ない。
- ・ 「同じ悩みを持つ御家庭があり安心した（ウチの子だけではなかった）」、「他の親御さんの話を聞けて参考になった」、「楽しく参加できた」、「また来年も参加したい」など、特に1学年において非常に好評である。
- ・ プログラムを運営するファシリテーターの力量や、保護者同士の活発な交流を目の当たりにして、立ち会った本校教員にとっても大変参考となっている。多くの学校で導入してはどうか。
- ・ 保護者の話合いのみに終わらせるのではなく、最後に、権威のある人からの「こうしたらよい」という具体的なアドバイスがある資料等が配付されると参加者の満足度や、学習したという実感が高まるのではないか。
- ・ 講師に来てくださった方以外にも、特別支援学校の実態を踏まえた保護者向けのお話やワークショップをしていただける外部人材がいるなら情報提供していただければ、今後の参考にしたい。
- ・ 保護者からは、思春期の子どもとの関わり方に関する悩み（反抗期）の相談が多いため、その解決の糸口になれば、と思っている。子育てに関する他の問題についても、専門家のアドバイスが受けられる研修があれば、活用していきたい。

[活用がない学校(80校)の集計結果]

○プログラムに対する自由記述

- ・ これをきっかけに内容について学ばせていただき、活用できるところは利用を計画したい。
- ・ 勉強不足のため本プログラム内容の詳細は分からないが、親に対して子どものことについて学んでもらう機会を設けることはとても良いことだと思う。
- ・ できれば中学生のときにプログラムを実施していただけると良いのではないかなと思う。
- ・ 本校ではこのプログラムを活用したことがないので、PTA総会や学年部会の際に配付できるようにリーフレット等をご紹介いただけると助かる。
- ・ 短時間で実施できるプログラムの存在を知りたい。
- ・ 子育てを終えた先輩諸氏の体験談やアドバイスなどであれば親は関心を示すかもしれない。
- ・ このプログラムに関する先生方の認知度は低いと考えられる。実際に学校行事の計画を担当する教務主任（教務担当主幹教諭）の研修機会があれば、このプログラムの活用法について紹介してもよいかなと思う。
- ・ プログラムの内容を抜粋し、本校の実態に合わせて活用したいと思った。

- ・プログラムについて、理解不足だったので、今後理解を深めて、活用できればよいと思った。
- ・内容は大変よいものだと思うが、本校の実態として、多種多様な病気・障害のある児童生徒が在籍し、少人数なため、一斉に同じ内容で学習会を実施することが難しいのが現状である。
- ・必要な生徒（家庭）がでた際にすぐに取り出して使えるようなデータの保管と継続的な周知をお願いできればありがたい。
- ・プログラムについて校内で引継ぎが十分ではなかった。今後、参考にさせていただこうと思う。
- ・保護者の子育てに関する研修の機会を持っているので、プログラムの必要性をあまり感じていない。

（６）アンケート調査のまとめ

保護者を対象に子どもとの関わり方について学ぶ機会を設けているのは、30校34%であった。そして、保護者を対象にした学びの機会に「親学習プログラム・思春期版家庭教育支援プログラム」を活用したことがあるのは、8校9%という1割に満たない状況であった。高校生の保護者対象の学習機会の提供が少ないことが明らかになるとともに、「親学習プログラム・思春期版家庭教育支援プログラム」の活用状況について知ることができた。

「親学習プログラム・思春期版家庭教育支援プログラム」の活用がある学校については、過去3年間での実施が7校から4校になり、減少傾向にあることが分かった。また、活用している中で、「保護者のコミュニケーションが深まる」、「子育てに関する悩みの軽減につながる」といった効果を感じている学校が多く、「同じような悩みや考えを持つ存在を知ることができる」、「正解を求めるのではなく、話し合い、発表して悩みを共有できる」、「教員側の保護者理解の場として良い機会になる」といった参加型学習のメリットについても十分感じ取っている学校があった。そして、全ての学校で、実施する際は外部人材を活用しており、「活動の雰囲気がよくなる」、「保護者や学校、教員により効果が見られる」といった効果を多くの学校で感じていた。さらに教員の負担軽減につながると感じている学校が半数あり、「会場づくりなども含めて全部やってくれるのでありがたい」といった回答も見られた。

「親学習プログラム・思春期版家庭教育支援プログラム」の活用がない学校については、活用したことがない理由として、「プログラムを知らない」が最も多く、続いて「活用の場が分からない」、「活用方法が分からない」であった。その他の理由に、「行事に新たに組み入れる時間的、人的余裕がない」といった回答が多く見られたり、「親学習プログラム」の周知が不十分で、よく分からないものと見なされたりしている状況を確認することができた。

保護者を対象に子育てについて学ぶ機会を提供する際に重視している点を尋ねたところ、活用がある学校も活用がない学校も「保護者のニーズに合った学習内容の提供」が最も多い回答であった。また、「講演形式の学習機会の提供」を重視しているとする学校は、活用がある学校の1校に対して、活用がない学校は20校となり、回答結果に差が見られた。

自由記述において、活用がある学校では、「通学区域が広域になる高校の保護者は相互に交流する機

会が少ない」、「プログラム実施は教員にとって大変参考になっている、多くの学校で導入してはどうか」、「具体的なアドバイスがある資料等の配付で参加者の満足度や意欲が高まるのでは」、「特別支援学校の実態を把握している外部人材がいたら情報提供してほしい」、「保護者からは子どもとの関わり方に関する悩みの相談が多い」といったことがあった。また、活用がない学校では、「プログラムについて理解不足だった」、「引き継ぎが不十分だった」、「先生の認知度は低い」、「研修の機会があれば紹介してもよい」、「本校の実態に合わせて活用したい」、「短時間で実施できるプログラムを知りたい」、特別支援学校からは、「子育てを終えた方の体験談やアドバイスなどあれば保護者は関心を示すかもしれない」、「児童の実態や人数によって一斉に同じ内容は難しい」といったことが出ている。

1-3 ヒアリング調査・鹿沼東高等学校

県立学校対象のアンケート調査結果から、親学習プログラム実施校が少なくなっている状況が判明したが、そうした中、継続実施している学校がある。その学校にヒアリング調査を行い、持続可能にしている要因等を探ることで、本研究につながるヒントが得られるのではと考えた。

「思春期版家庭教育支援プログラム促進モデル事業」のモデル校として平成 25 年度に「親学習プログラム」の実施をスタートして以来、継続している鹿沼東高等学校に、なぜ続けているのか秘訣などをきいてみた。



どのように実施していますか？

毎年 10 月頃、「思春期の子どもとの関わり方」をテーマに第 1 学年保護者会学習会で実施しています。実施期日やクラス単位で行うことなど、方法や内容を上都賀教育事務所ふれあい学習課へ伝え、ファシリテーターの手配から当日の資料準備などすべてやっていただき、大変助かっています。また、親学習プログラム指導者研修を修了した地域で活動されている方がファシリテーターであることも、参加する保護者にとって身近な存在に感じ、安心して話せることにつながっています。毎回保護者の満足度が高く、教員にとっても保護者理解につながる貴重な時間となっています。



担任とファシリテーターが簡単に打合せをしてから開始しました

各クラスにファシリテーターが入り、ファシリテーターの見事な進行により終始明るい雰囲気でした



[平成 30 年度第 1 学年保護者学習会より]



実施することでどんな効果がありますか？

通学範囲が広いため、特に第1学年は生徒も保護者も孤立してしまう恐れがあります。しかし、親学習プログラムを実施することによって、保護者同士をつなぐネットワークづくりになり、生徒と親を孤立させないために大いに役立っています。また、これからの学びの形態として重要視されている「アクティブラーニング」について、教員や生徒向けには研修や学習会など行うことはありますが、保護者向けには特にありません。でも、親学習プログラムを実施することで、保護者向けの学びの場として提供できることになり、家庭の教育力向上を図ることにもつながっていきます。



継続できている要因は何ですか？

準備いらずで手軽に実施できる上に、生き生きと参加する保護者の姿を実際に目の当たりにした教員にとって保護者理解につながっていることが大きな要因になっていると思います。そして、第1学年で必ず実施するよう次年度の行事予定にしっかりと組み入れているのも大切なところです。また、継続してきたことで、親学習プログラムの様子や効果を知っている教員がどの学年にもいるようになっています。

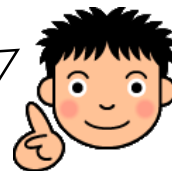


「親学習プログラム」のファシリテーターは、親学習プログラム指導者研修修了者や総合教育センター、各教育事務所の社会教育主事が務めます。親学習プログラム指導者研修修了者は、グループを作り市町の事業や公民館の講座などでボランティアで活躍しています。



今後について何かお考えなどありますか？

過去に、第2学年でも親学習プログラムを実施したことがありました。その時は、第1学年の実施日と連続し、ファシリテーターの確保に大変苦労したため、それ以降は実施していません。ただ、親学習プログラムの効果を考えると、第2学年でも実施したいと強く思っていて、次年度は、PTA総会の全体会后に短時間プログラム（進路に関する内容）を実施する方向で考えています。



今回の調査研究や親学習プログラムに対してアドバイスをお願いします！

「親学習プログラム」という名前が堅く、その名前を見ただけで保護者は構えてしまったり、参加を断ったりすることもあります。もっと柔らかい印象の名前（キャッチコピー的な）を考えてもよいと思います。例えば、「〇〇トーク」、「親？トーク」、「保護者版アクティブラーニング」など、保護者目線で考えることも必要ではないでしょうか。また、対象の人数や会場、時期に合わせて選べることができるプログラムが用意されているとよいと思います。例えば、教材キットのように、実施時間に合わせてS・M・Lセットを提供するといったようなことができると、活用促進につながるのではないかと思います。

今回の調査研究で、短時間プログラムを新たに開発されていると伺い、大変期待しています。活用する学校を増やすために、協力できることがあれば、喜んでやらせていただきます。



☆コラム



親としての学び合いを高校でも

子どもが高校生になると、親はほっとして子育てが終わったような気持ちになることが多いと思います。しかし現実には、終わるところか、新しい悩みや不安が山積します。高校生になったのだからと、放任してしまう親もあります。親子でほとんど会話ができなくなることもあります。

世の中はどんどん変化して、子どもたちが世の中で活躍する10年後、20年後には通信手段も職業も働き方も大きく変わっていることでしょう。親世代が自分たちが学んだ知識や技術を子ども世代に教え込むという時代ではなくなりました。親もまた新しい親の役割を学んでいかなければならない時代です。親たちはどのように親の在り方を学んでいけばよいのでしょうか。

大切なことは、同じ世代の親同士が、共に学び合うことで最も力になる学習ができるということです。

子どもの将来や生き方などについては、正しい答えが一つだけあるわけではありません。親の在り方も正解が一つではありません。いろいろな親がいろいろな子育てをしています。多様な生き方、多様な考え方があることを知ること、なぜそうしているのかを知ること、自分も豊かになることができるのです。

親の役目は終わることはありません。学校は、もっと思春期の子を持つ親同士が、学び合える場となって欲しいと思います。保護者や教師、地域の人材と一緒に、自分の学校に合った学びの場を工夫されることを期待します。



宇都宮共和国大学
特任教授
牧野カツコ

保護者が子どもに大事なことを語ることができる最終段階が高校時代である。



親学習の基本は、他人の話を聞いて、それぞれの考えの違いを知ることである。

〔研究会議の様子〕